すまい×すまう　毎週木曜日掲載　PR

二世帯住宅 楽しく、豊かに

子ども夫婦は親夫婦との同居をいやがるものという図式が、時代とともに様変わりし、同居のありがたさが見直され、いまあえて両親を迎え子ども夫婦が増えてきた。そこには、新しい発想の二世帯住宅の登場も大きくかかわっているようだ。

設計時に本音を

高齢化社会がいよいよ本格化し、共働き夫婦が増え、住宅事情の厳しさは相変わらず。そんななか、親世帯と子世帯がひとつの家に暮らす二世帯住宅がじわじわ増えている。

親世帯にとっては、万一の病気や、年をとって思うように動けなくなったときなど、そばに頼れる子がいると安心。子もそんなときは親の助けになりたいと考える。

子世帯にとっては、育児のバックアップが期待できる。ちゃっかり食事までという人もいて、とくに共働き夫婦にはありがたい。親も、子や孫と楽しく暮らせたら幸せだ。

そして、経済的理由もある。時代を反映して、ひとりっ子同士の夫婦にそれぞれの親夫婦が同居したり、親と子の二組の夫婦に単身者の兄弟姉妹が同居するなど、二世帯を超え、三世帯以上の多世帯住宅も決して珍しくない。

ただ、「昔の大家族制と同じように考えて暮らすと、取り返しのつかない状態に陥ってしまうことにもなる」とは本多和夫さん（K2・PLAN総本多建築設計事務所）のアドバイス。多くの二（多）世帯住宅を手がけてきた建築家だ。

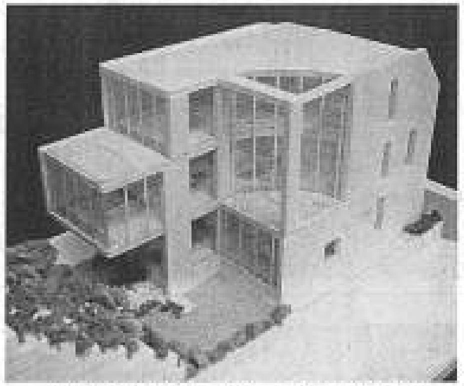
世代による価値観の違いはより大きくなっていて、ライフスタイルもそれぞれで違う。ちょっとしたことで、感情の行き違いが生じやすい。

多世帯住宅には、共有空間や独立空間など、さまざまな住まいスタイルがある。いずれにしてもその成功には、設計段階で、お互いが本音を出し合い話し合いが必要。思いやりを持ちつつ、お互いの希望や要望を出してほしい。「それぞれ異なる建築主のこだわりや夢をかたちにするのが設計者の仕事」と本多さん。

本多さんの多世帯住宅の設計での目標は、みんなが集まって暮らすことで、家がより楽しく、豊かになること。そのために、まず家の音や視線に配慮する。生活音が筒抜けになるとお互いに不愉快になる。いつも見られていると思うと落ち着かない。そこで、設計によりプライバシーを守る工夫をする。暮らしは聞こえず見えないが、姿を向けたときなどに隣や階上に人がいる気配を感じられることを大切にしながら、家族のよりどころとなる空間を提供する。価値観やライフスタイルの違いをうまくミックスし、その敷地の長所を生かしながら短所を補う多世帯住宅をデザインするという。

ある建築主からの「季節や家族の行事などをまめにやるようになって、みんなが一緒に暮らすのって楽しいものだと感じた」という声が、その成果を物語っている。

孫がちょこっと出入りできるドアをつくることもあるという。いま進行中の三世帯住宅は、孫の部屋から廊下の祖父母の部屋に、収納式のはしごで降りて行ける設計だ。



孫が行き来するはしごなど、三世帯三代のこだわりと夢がかたちに（本多和夫　小石川の家）

HMも積極提案

ハウスメーカー（HM）も二世帯住宅に積極的で、積水ハウスはそのひとつ。同社のサイト「住まい方いろいろ」内の「本音で暮らす二世帯住宅」では、従来のかたちにとらわれない、新しい発想の二世帯住宅への発想と考え方を提案している。

新発想 タイプいろいろ

「親夫婦と同居する場合、キッチンさえ分けておけばうまくいくだろうというのは大きな間違い」。「親夫婦と同居の場合、意外と夫婦が自分の居場所が欲しいと分離型要望が高い」。これらは二世帯住宅の入居者へのアンケートから導かれた分析の一例だが、とても興味深い。

また、玄関、キッチン、浴室など、すべてを別々に設ける「生活独立型」。キッチンは別でも、すまいのほとんどを共有する「食生活分離型」。プライベートスペース以外を共有する「生活共同型」。これら三つの基本タイプに分け、わが家らしくアレンジすることで、自分たちの思いや条件にあった「本音で暮らす二世帯住宅」を探っていく。

そして、生活独立型は「家族交流のしかけを工夫し、互いの気配を感じつつも快適に」。食生活分離型は「囲い込みをなくして共有部分を上手に使い分ける」。生活共同型は「間取りの工夫で気兼ねとストレスを極力軽減」と、タイプ別のアドバイスと成功例を知ることができる。

実際の商品にも、二世帯住宅への取り組みが積極的だ。4月に誕生した「Be ECORD（ビーエコルド）」「縁のある住まい」は、団塊世代がメインターゲット。自分らしく大人のセカンドライフを楽しみながら、いつまでも快適に暮らしていけるすまいを提案。

さまざまな暮らし方に対応しているが、子ども夫婦や自分の親との多世帯同居も想定。生活独立型同居から生活共同同居まで、自由度も高い。

快適さと共に将来の安心を考えた工夫が随所に（ビーエコルド「縁のある住まい」）

時代に応えて、新しい多世帯住宅。大切なのは話し合いで、そのときに乗り越えるべきものが多い。さらに、一緒に住むようになってからも、「思いやりや助け合うことを心がければ、多世帯同居は楽しく、とても豊かだ」という本多さんの言葉が重い。

◇

K2・PLAN　http://www.mmjp.or.jp/K2-PLAN/

住まい方いろいろ（積水ハウス）　http://www.sekisuihouse.co.jp/style/

暮らしの新スタイル ④

おしゃべり家電 進化し続々登場

さわやかに「おはようございます」とあいさつをしたり、少し得意げに「ご飯が炊けました」と知らせたり。身の回りに、おしゃべりな家電が増えている。その声に、つい「はい、ご苦労さま」と答えてしまう自分に、「これは私だけじゃないはず！」と思った人も少なくないのでは。

IHクッキングヒーターの一部のモデルに搭載されている音声ガイドが象徴的だ。松下電工の「KZ-MSW33C」は「グリルメニューボタンでメニューを選んでください」や「左ヒーターが沸騰後なので加熱を止めました」などとしゃべる。操作の確認やガイドをしたり、タイマー終了を知らせたり、エラーの種類や安全装置の動作を知らせるなど、かなりのおしゃべり上手。約100フレーズを駆使するとか。

ガスのコンロも負けてはいない。「電源を切ります」「ご飯が炊けました」（東京ガス exe+navi）など、操作の確認や操作ミス、エラーなどを音声で知らせるモデルがある。

"おしゃべり家電"の登場は、高齢者などとともに、誰にも使いやすいユニバーサルデザインとして積極的に取り入れられるようになったことが大きな一因。機器の状態や操作手順を音声でわかりやすく伝えることで、より多くの人がもっと簡単に機器を使えるようになることを目指している（松下電器）という。

炊飯器（SR-SW101）が「メニューを三角ボタンで選んでください」「炊飯ボタンを押してください」など次の操作を促し、オーブンレンジ（NE-W300）が「予熱は約8分です」のように操作の戸惑いをやわらげるなど、松下電器は、キッチンをはじめ家事、AVにいたるまで主要分野に「おしゃべり家電」モデルを積極的に展開している。

http://www.yomiuri.co.jp/homeguide/
「暮らしの新スタイル」を読むことが出来ます

他社からも続々登場。東芝の掃除機（VC-95XP）は「ゴミがたまりました。ゴミを捨ててください」と教えたりする。松下電工のシーリングライト「ツインPa」には「約50%の省エネです」「お好みの切り替えをおすすめします」と、点灯時の省エネ度や照光の切り替え時期などを教えてくれるモデルがある。

富士通ゼネラルのエアコン（ノクリア）は「運転を停止します」と、各操作に対してエアコンが音声で対応。TOTOの温水洗浄便座（アプリコット）は「便器から離れると、自動で水が流れます」と使い方をやさしく案内してくれる。

いかにもコンピューターの声、は昔の話。耳にも柔らかな肉声を感じたいま、さらにつややかで聞きやすい声でガイドしてくれる"おしゃべり家電"へと進化していきそうだ。

【企画・制作】読売新聞東京本社広告局